

1 自己評価及び外部評価結果

(別紙4)

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	2470300860		
法人名	(有)日本サポートリンク		
事業所名	色えんぴつ・鈴鹿		
所在地	三重県鈴鹿市下大久保町2290番地の12		
自己評価作成日	令和5年7月18日	評価結果市町提出日	

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhvu_detail_022_kani=true&JizyosyoCd=2470300860-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会		
所在地	津市桜橋2丁目131		
訪問調査日	令和5年8月8日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

施設内には畑や果樹があり自然に触れ合う機会が多い。収穫した野菜や果物はそのまま食べたり、料理やおやつに使い四季を感じてもらっている。
入居前から畑をしていた方とは次は何を植えるかの相談をし、みんなで野菜づくりを楽しんでいる。鉢植えや草むしりも職員だけでなく利用者も一緒にしている。
近隣には散歩コースもあり、途中に保育園があり散歩中に会った園児や近隣の方からは気軽に声をかけてもらっている。
また利用者の誕生日にはそれぞれ昼食に食べたい物をお祝い膳として提供している。おやつにはケーキや、本人の希望に合わせ、草餅やおはぎを提供している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

制限された生活を強いられた長いコロナ禍であった。今年の5月、感染症は5類に移行し幾分平穏になりつつある。その間、ユーチューブが導入され、利用者の新たな楽しみが増えている。また、タブレットの導入で、記録がタイムリーにでき、職員間の共有、介護支援専門員の介護計画作成の活用や医師の訪問診療などにも活用ができ効果がある。事業所は鈴鹿市の西部、四日市市と隣接している。遠くに鈴鹿の山が見え、周辺は畑、林、住宅、工場が点在した自然豊かな環境である。事業所にも広い庭があり、家庭菜園作りや梅やモモなどの果樹も植えられている。時には庭でイベントが開かれている。自然豊かな環境と社長が週2~3回、事業所に顔を出し、気軽に職員と話ができる体制が実践されている。

V. サービスの成果に関する項目（アウトカム項目） ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目: 23, 24, 25) ○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目: 9, 10, 19) ○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目: 18, 38) ○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目: 2, 20) ○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目: 38) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目: 4) ○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目: 36, 37) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目: 11, 12) ○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目: 49) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目: 30, 31) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目: 28) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	目につきやすいところに掲げ、理念をもとに一人ひとりに合った声掛けや支援を行っている。	理念”あなたらしく、いつまでも”が職員の一貫した介護支援理念である。みんな同じではない、ひとり一人が違うことを理解し、目の前で顔を見て、その人にあった話し方、接し方をするように心がけている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍では外出や外部との交流を制限せざるおえなかったが、その中でも近隣への散歩は続けており、出会った方とは挨拶や会話を持つように心がけていた。	コロナ禍が収まりつつあっても、まだ本格的な回復には至っていない。ボランティアの受け入れもできないが、散歩で会う人と挨拶を交わしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	近隣の方が直接相談にいられた事もあり、困りごとを聞き助言をした。また常に地域の様々な情報の収集に努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍で約3年開催ができなかったが、5月に5類の位置づけに変更になった為、6月は施設内で開催できた。施設の近況報告をするとともに地域の実情を聞く事ができ久しぶりに協力し合う関係作りができた。	運営推進会議は本年6月に家族、自治会長の参加を得て開催した。利用者状況はじめ事業所の現況報告などを行い、意見交換の場であった。今後も感染症対策に万全を期し開催をする予定である。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	鈴鹿亀山広域連合には制度上の必要な事を尋ねている。包括支援センターには運営推進会議への参加依頼や地域の情報を聞いたり、空室が出ると入所者を募ったりしている。	広域連合には「利用統計者数」「利用開始及び終了」の連絡票の事務報告書を持参している。また、地域包括支援センターへは利用待機者の情報を得たり、運営推進会議への出席依頼をしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	現在、職員が手薄な時間帯のみ玄関の施錠を行っている。年2回は研修の機会があり理解を深めている。また身体拘束等の適正化対策を検討する委員会を設けており、3か月に一度はその都度必要な事を検討している。	現在、身体拘束に至る利用者はいない。身体拘束適正化委員会を3か月毎に開催をしている。議事録もある。職員は、研修を通して拘束の弊害について理解をしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	3か月に1度は虐待防止対策会議を開催している。年2回の研修の参加、お茶の水ケアサービス学院の動画でいつでも研修に参加できるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるように支援している	現在、1名成年後見人制度を利用している方がおられ、必要に応じ後見人に相談や協力依頼を行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は、重要事項説明書に沿って細かく説明を行っている。解約時や改定の際も利用者、家族に丁寧に説明して同意をもらっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者には話しかける機会を持ち、意見や要望を引き出せるよう努めている。家族には面会時に聞き取れるよう意識している。また面会ノートも活用している。外部は介護相談員の派遣を再開する予定をしている。	コロナが5類に移行し家族との面会は緩和しつつある。利用者ごとに面会ノートがあり、日付や名前のほか、コメントが書ける。事業所からの返信もある。家族へは毎月「たより」を送付し、様子を知らせている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年1回の個人面談実施。毎年個々の目標を設定してもらい、成果の聞き取りを行っている。月々の会議で職員からの提案などには、耳を傾け極力反映させるようにしている。	年に1回、社長と個別懇談があり、普段も事務所で会う機会が多々あり、いつでも話ができる。駐車場の整備や庭の柵の設置などの要望があり実現した。コロナ禍で利用者の外出機会が減り、代わりに楽しめる支援としてユーチューブの導入が図られた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	週2～3回は職場に顔を出し気軽に職員と話をし、問題点などがあれば、すぐに対処している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修に関しては、集まって行う事が難しい為、リモートではあるが自分の都合の良い時に、自宅でも受講できる体制を整えている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍の為交流は出来ない為、リモートの研修の中で同業職員との意見交換などの交流を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に本人と面談をして困りごとや生活歴を聞いている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前だけでなく面会に来られた時にも声をかけ困りごとを聞いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	必要があれば施設側からも他のサービス利用の提案もしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	1日を共有する者として利用者からの訴えも取り入れ考えている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時や手紙等で報告をし、必要に応じて支援をお願いしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍が続いていた為、家族との外出は制限していた。現在、面会は増えてきている。短時間での面会となるが会えるよう努めている。	利用者の同級生（旅行仲間）が訪ねてくれて喜びの対面をした。また、男性利用者は床屋へ行きたい希望があり支援をしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	関係を把握し、それぞれ相性の合う方との橋渡しをするよう努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院や他施設に移動された方でも必要な情報提供を行ったり、家族から近況の連絡をもらったり関係を断ち切らないような支援に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの思いや希望の把握に努め、可能な限り実施している。	利用者は意見や要望を言える元気な方が多く、何気ない会話やポロっと出た言葉から思いや意向の把握に努めている。聞いたことはタブレットで職員間で共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	生活環境や暮らしはできるだけ多く聞き取り、出来る限りなじみの暮らしを取り入れている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	支援経過や職員からの意見を聞き把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月に1度カンファレンスにて必要な支援について話し合っている。 家族の希望の聞き取りも取り入れた計画を作成している。	月に1回全員のカンファレンスを行い、モニタリングをして利用者の状態にあった介護計画を作成している。短期目標を6か月、長期目標を1年として、変化があればその都度の見直しをしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録はタブレットを利用しており全職員で情報共有に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時に生まれるニーズに対して必要な支援が受けられるよう取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在地域資源の把握や協働に至っていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	定期的な受診、訪問診療以外に、必要時の受診や往診は本人及び家族の希望や医療機関と連絡を取り合い行っている。	全員、協力医が主治医である。訪問診療を受けている方は4名、4人は定期的に受診をしている。口腔ケアで訪問診療を受けている方が3名ある。非常勤の看護師を配置しており、医療的な相談のほか夜間のオンコールができる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週に2回出勤があり、気になる事の報告や状態確認してもらい、処置や内服薬の相談等している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は、本人の情報をできるだけ多く伝えるよう努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に緊急時の意思確認を取っており主治医と共有している。状態が変わった時は、主治医を通して再度家族に意思確認を行い、施設でできる事、できない事を説明し支援方法を相談している。	看取りについては、事前に出来ること、出来ないことを説明している。対応はその都度医師や家族と相談し、確認をして対応をしている。昨年9月、本年1月にお2人を看取り支援をした。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時や事故発生時の応急手当の手技は、消防所主催の講習を受けたり研修等でそれぞれ知識を身につけている。また主治医に相談しやすいようバイタルリンクを導入している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、夜間想定を含めた訓練を行っている。参加できない職員にも周知できるように報告書を作成しているが、参加していないとわからない事もある為定期的に実施している。	昨今の異常気象で想定外の災害が発生している。この事業所周辺は比較的安全と思われるが油断はできない。年2回の訓練を実施しているが、更なる対策が求められる。	市の防災担当者や消防署に相談し、避難所へ行けない時の対応やAEDの貸与等々緊急時の対応、指導を仰ぐように期待する。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	その人に合った声掛けや関わり方に注意しながら失礼のないような対応に心がけているが、不適切な声掛けや対応をしてしまった場合には、職員同士で話し合い自己反省の機会をつくっている。	羞恥心の伴うこと、特に声がけに配慮をしている。利用者が居室にみえる時には、プライバシーに配慮しドアは閉めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	可能なかぎり希望に添えるよう行事や食べたいもの等を聞くように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりに応じた生活リズムを聞き実行している。レク等にも誘うが無理強くないよう気をつけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その人が着たい服装を無理のない範囲で着用してもらっている。重ね着や温度にあった服装に注意し熱中症の予防に努めている。入浴後、朝の整容時の髪のセットは任せている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	手作りやお祝い膳を提供する際希望を聞き一緒に作る事もある。普段の会話で好みを聞き取りおやつ作りもしている。	コロナ禍が始まり調理等の検討をして、業者委託に切り替えた。朝食とおやつは職員が担っている。敬老の日、椿神社へ参拝し、名物の鶏めしを食べるのが楽しみであったが今は自粛中である。誕生日は好きなものが出され楽しみにしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	コロナ対策で職員と一緒に食べる事は無いがそれぞれに合った食事量を提供している。 水分の接種状況を把握、周知し種類をかえたりして提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の口腔ケアへ誘導したり、希望者には月1回の歯科の訪問診療を受けてもらっている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自立している方は定期的に行っている事を確認しているが、尿意に不安がある方には排泄チェック表を使い職員で周知し食事前後で声掛けをしている。	トイレで排泄をしている。中には外での排泄習慣が残って、職員の間隙をぬって、外の生垣で排泄する利用者がある。居室にトイレの設備がないので、1名の利用者は夜間のみポータブルトイレを使っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘予防を兼ねてヤクルトを定期購入している。 水分量や汁物や朝食で食物繊維が摂れるよう意識している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日は男性、女性に分けているが、拒否があった場合は無理に入っていたことはせず、時間をおいて再度声かけしたり、日にちを替えたり臨機応変の対応している。	週3回、午後の入浴が多い。利用者は男女それぞれ4名で、男性の入浴日、女性の入浴日と分かれている。同性介助、入浴剤を使っている。菖蒲湯やゆず湯も季節の楽しみである。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	それぞれ休みたい時間に休んでもらっている。室温や明るさにも個々に応じて対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	お薬情報がすぐ確認できるように、事務所に置いてある。その為職員で周知できるようにしている。誤薬が無いよう食事前の薬の準備、服薬時にチェックしながら出している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	その方に応じて楽しみを見つけて頂けるように普段の会話から聞き出している。無理強いはいしないよう気を付けている。また、月1回程外出やイベントを企画している。おやつ作りもしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ過で外出はできなかったが5類になり感染状況で外出を行えるようになってきた。家族との外出は難しいが月のイベントで公園へ行く事ができた。	コロナ禍で外出は自粛してきた。あじさい祭り、いちご狩りや紅葉狩りがささやかな楽しみ支援であった。今後、徐々に解除され、今夏の猛暑が終わったら外出支援をする意向である。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	少額であれば自己管理をしている方はいるが、ほとんど施設管理をしている。外出や散髪へ行くときは預り金から出している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙を書かれる方はおらず、家族へ短時間で電話を頻回利用する方がいるので、制限はしているが、必要に応じて電話はしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるよう工夫している	室温に注意しエアコンの風が直接当たらないよう配慮し、庭に咲いていた花を利用者と活け季節感を感じてもらっている。	リビングから居室は直線でわかりやすい。リビングから中庭が見えて、野菜や果樹の出来具合が確認出来て利用者の楽しみ支援になっている。空調もよく効いている。調査日は高校野球がテレビ放映中でテレビを囲んでみんなで観戦されていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一人になれる空間はないが、気の合う利用者同士で座れるよう席がすぐ移動できるよう一人がけの席を多くした。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた物やテレビ、アルバム等持って来てもらい、家にいた時と変わらない環境をつくるよう努めている。	クローゼットが設備しており、きちんと収納されている。衣装ケースや調度品、テレビなど思い思いの物を持ち込まれて、自分らしい居室である。利用者の中には、自分用の新聞を個人購読されている方もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内は安全に過ごせるようバリアフリーになっている。また適所に手すりも設置してある。自分の部屋は分かりやすい様表札等を掲示している。		